



みんなで応援しよう！東京2020 オリンピック・パラリンピック競技大会



戦後75年
東京五輪1年前
特別企画

第二次世界大戦（太平洋戦争）から戦後75年、東京2020大会の1年前となる本年、パラオ共和国のホストタウンである本市は、ホストタウンとなった歴史的なきっかけを知る機会と東京2020大会の機運を醸成することなどを目的に、6月から8月にかけて対談や展示等の3事業を特別企画として実施しました。

【第1弾】6月22日(月) 水戸二連隊ペリリュー島慰霊会事務局長 影山幸雄氏とパラオ共和国研修生との対談



▲詳細については、広報常陸大宮
令和2年7月号をご覧ください。

【第2弾】7月24日(金)～8月23日(日) ホストタウンパネル展 ～ペリリュー島の戦いから現在、そして未来へ～

市内道の駅(かわプラザ、北斗星)2カ所で、ペリリュー島の戦いから現在までの交流を紹介する「ホストタウンパネル展」を実施しました。

両会場では、太平洋戦争史上最も壮絶な死闘といわれたペリリュー島の戦いの戦時中の写真や遺品（飯ごうや水筒）などのほか、ホストタウン登録や事前キャンプ締結に至るパラオとの交流記録、パラオ研修生の活動について、事前キャンプ時に来市したパラオ共和国選手団のサイン入りTシャツなどを展示しました。

来場者からは、「こんなに美しい熱帯の島で、戦争という悲しい出来事が起こったことは信じがたいが、このことを忘れず、繰り返さないという気持ちを持ち続けたい」との感想がありました。



◀戦没者遺品など
道の駅常陸大宮
～かわプラザ～



▶パラオ選手
サイン入りTシャツなど
道の駅みわ 北斗星

※ペリリュー島の戦いとは？

パラオ共和国ペリリュー島は、日本から真南に約3,200kmに位置する島で、戦時中は飛行場も建設された戦略的要衝。昭和19年9月に上陸した米軍に対し、日本軍は自然・人工洞窟等にこもり、持久戦で大打撃を与えたものの、2ヵ月後の11月に玉砕。日本兵の戦死者数は1万人を超え、うち75人が常陸大宮市出身者。現在まで約7,900柱の遺骨が収集されたが、いまだに約2,300柱が島内に眠っているとされる。戦後70年の2015年4月に、天皇后両陛下（現在の上皇上皇后両陛下）が、ペリリュー島を慰霊訪問され、現在では、ご訪問された4月9日がペリリュー州の祝日となっている。



ペリリュー島に
今も残る
数多くの戦跡

◀日本海軍司令部

日本海軍20センチ
曲射砲▶



【第3弾】8月23日(日) 「ペリリュー島の戦いにおける遺族と将来の交流を担う若者（高校生）との対談」

本市のホストタウン交流事業のサポートを行う「パラオブルーサポーター（常陸大宮市東京2020オリパラボランティア）」の高校生と市内高等学校に通う生徒計9名が、ペリリュー島の戦いにおける戦没者のご遺族で市内山方地域に住む吉澤幸吉さん・喜美子さんご夫妻と市役所で対談を行いました。この事業は、高校生が、本市がパラオ共和国のホストタウンとなった原点を理解し、今後のホストタウン交流事業への参加促進と将来の交流の担い手の育成を図るため実施したものです。



▲話をする吉澤幸吉さん(右)喜美子さん(左)ご夫妻

○叔父の勇さんとペリリュー島の戦い

まず、喜美子さんがペリリュー島の戦いで戦死した叔父の吉澤勇さんの生い立ちについて話しました。勇さんは、大正9年(1920)年4月生まれ。満州で勤務していた際、召集令状が届き、歩兵第二連隊に入隊しパラオ共和国のペリリュー島へ渡りました。ペリリュー島では、日本軍約10,000人とアメリカ軍約48,000人の死闘が繰り広げられ、勇さんは24歳の若さで亡くなりました。喜美子さんは、「激戦地だったと伝え聞くペリリュー島の戦いで戦死し、どのようにして、また、島内のどこで亡くなったかについてはわからない。洞窟の中、または空爆、あるいは、食べ物や飲む水がなかったことから飢えて亡くなったのかもしれない。それを想像するだけでも悲しくなる」と参加した高校生に向けて戦争の悲惨さを伝えました。

○戦後のパラオへ寄せる想いと慰霊訪問、そしてホストタウン交流

吉澤さんご夫妻は、3年前、ペリリュー島出身の研修生3名と地区のイベントで交流しました。喜美子さんは「パラオについては、これまではお盆の時に思い返す程度だった」と話し、本市がパラオ共和国のホストタウンとなったことで、研修生と出会い、パラオを身近に感じるようになったと話しました。

また、昨年2月、幸吉さんはペリリュー島を慰霊訪問しました。高校生から現地の様子を問われた幸吉さんは「船で向かいながら徐々に近づくペリリュー島は、とてもきれいな緑豊かな島。ただし、一歩足を踏み入ると、激戦の爪痕が今なお残り、日米両軍の戦車やゼロ戦、砲撃で無残な姿をした海軍司令部など多くの戦跡があった。なぜ、このような戦争が起こったのかと思うと胸が苦しく、言葉にもならなかった」と語りました。



▲無残な姿の日本軍戦車を見つめる幸吉さん
(ペリリュー飛行場内)



▲活発に質問や感想を述べる高校生の皆さん

○将来の交流を担う若者（高校生）へのメッセージ

最後に幸吉さんからは「戦争で数百万人の尊い命が犠牲となったことや今日聞いたことを心の片隅において忘れないでほしい。そして、このことを次の世代に伝えていってもらいたい」とのメッセージがあり、喜美子さんは「多くの若い命が失われた戦争で、私の叔父は、道半ばで夢や希望が絶たれた。私の父母が感じたであろう『つらさ』をみなさんに絶対に感じてほしくありません。語り継ぐことはもちろん、平和を願い、これからの常陸大宮市とパラオの友好交流の新しい世代の担い手となってください」と高校生たちに平和や未来への想いを伝えました。



▲参加者全員での記念撮影

○参加した高校生「私たちが繋いでいきたい」

参加した高校生からは、「75年しか経っていない戦争という事実の悲惨さやつらさを、まず、私たちの周りの身近な人たちに伝えていくことが重要である。今回の対談で私たちが平和で生きていることへの感謝の気持ちを抱いた」「戦争は教科書では分かり得ない複雑な想い等が交錯し、遺族の皆さんの気持ちを考えるだけで心がえぐられる悲しみや苦しみを感じた」「次世代に語り継ぐためにもペリリュー島を慰霊訪問したいという気持ちと共にパラオの人たちともっと交流し自分の目や耳で感じてみたい」との感想があり、今後の交流活動につながる対談となりました。

本市は、東京2020大会の開催を契機に、ホストタウンとなったパラオ共和国との歴史的つながりを次世代へ語り継ぐとともに、更なる友好交流を促進し、将来の国際交流等の担い手育成に努めてまいります。